

あとがき

早咲きが心配されたが、桜前線は平年並みのスピードでこの国の新しい年度の幕開けを飾っている。この時期は木々も一斉に目吹き、小さな若みどりはいとおいしいほどかわいい。

職場にも新人の初々しい顔が揃った。国家試験に合格して臨床検査技師の第一歩を踏み出した新人さんが、毎日緊張しながら一生懸命仕事に取り組んでいるその様子を見ると、新緑の若葉のようにこれから大きく成長して、臨床検査を盛り上げてほしいと期待がふくらむ。新人にとってこれからの毎日は実践の場で、覚えなくてはならないことが多く時間に追われて忙しく動き回っていて考えている余裕などない。そして自分の目標は自分で考え、自らの力でやっていかなくてはならない。学生のように抱いていた臨床検査技師像とは乖離が大きすぎて、こんなはずではなかったと迷いだすと5月病にかかってしまいそうだ。

でも医療の現場で大切なことは、大変さから逃げ出すという消極的な行動ではなく、気持ちを切り替えて積極的に流れに乗っていくのがよいと思う。職場にはベテランの先輩達が見守ってくれているし、何でも知っていて優しく相談にのってくれる生き字引のような技師もいる。でも勉強を継続することも忘れずに、これが一番大切なことと思う。まず手始めに「検査と技術」を読んで下さい。今月号の“病気のはなし”では、少し難しいが膵管内乳頭粘液性腫瘍の最新の疾患像の解説が、血友病については診断と治療の最新の進歩が詳しく解説されている。また本誌の特徴の一つであるが、検査データを疾患と関連つけてどのように解釈するかを学ぶ“疾患と検査値の推移”や“ラボクイズ”欄はほぼ毎号掲載される。常に頭を柔らかく保つために一読をお勧めしたい。“技術講座”の「赤血球沈降速度」は、今日の臨床検査では最も古い検査の一つで慢性炎症性疾患の検査として有用とされるが、特異性がないため要らない検査の一つにも挙げられている。この解説を読んで、潜在性の病態をスクリーニングするにはこういう検査も棄てたものではない、はるか後の世に生きているわれわれに先人の知恵が何か示唆を与えてくれているようにも感じた。このように本誌を毎月丁寧に読んでいくと、きっと知恵の蔵が建ちます。どうぞご愛読ください。

(大竹皓子)